

# シニアが関心寄せる 「自分史」 書き方、出版のポイント



自分がたどってきた道や、思い出をまとめる「自分史」。家族、一族の歩みをはじめ、所属する団体の歴史などに应用範囲も広がり、関心を寄せるシニア層が増えています。書き方や自費出版のポイント、注意点などを自分史関連の団体、出版社、専門家のアドバイスで紹介します。

(ライター・福田淳一)

## 自費出版社はまなす文庫

●中央区南11条西9丁目3の35、北海道印刷企画内 ☎551・8900



感謝の気持ちも込めて

20周年を迎える  
「はまなす文庫」の銘板



はまなす文庫の本を背に「自分史を残すと、子どもたちの心のよりどころになります」と語る岩山善則さん

中央区 はまなす文庫は創業52年目の北海道印刷企画の自分史など自費出版部門です。「伝え残す」「想いを力タチに」をモットーに、自分史をはじめ、句集、歌集、詩集、写真集、画集、郷土史、回顧録など広い意味での自分史関連の本づくりを手掛け、9月で20周年を迎えます。発足以来、営業を担当している北海道印刷企画の取締役営業部長、岩山善則さん(56)は「小説仕立ての自分史もありますし、家系図を作り、ルーツを探って本にまとめる手法もあります」と説明します。

岩山さんによると、自分史出版のポイントは第一に本の大きさ、紙質、色、書体など装丁です。第二に制作部数。年賀状を出す枚数を基準に、30万円から50万円程度で100部から300部の範囲で作る例が多いようですが、配って足りなくなると印刷の準備のやり直しに伴う費用で割高になるので、余裕をもった部数を初めから作った方が経済的だそうです。第三に感謝の気持ち。読んだ人に「いい本だ」と思わせる秘訣は、家族や周りの人たちへの感謝の気持ちが込められていることだと教えてくれました。そして岩山さんは、自分史出版の魅力をこう語ります。「共通するのは、世界で一冊しかない自分の本を作り上げるといふ、大きな喜びです。本を作る過程は、家を建てることにも似ています。そのワクワク感を味わってほしい」